

# 多元化する自己とジェンダー

—ポルノグラフィの性別越境的消費行動の分析—

首都大学東京 大倉 韻

## 目的・意義

本報告は自らとは異なる性別を対象に制作されたポルノグラフィの消費（性別越境的消費）とそれに関する男女間のコミュニケーションを分析することを通して、現代の若者が自らの性別をどのように取り扱っているかを考察することである。日本では近年女性向けポルノグラフィ、中でも男性同性愛を扱った「やおい」「ボーイズラブ」の生産・消費が盛んであり、学術的にも多くの知見をもたらしている。また男性向けポルノグラフィを積極的に受容する女性の存在も認知されるようになっており、それら作品について両性が語り合う場面もイベント会場においてしばしばみられる。だがきわめてジェンダー化され、両性間で共感することが困難であろうこれらポルノグラフィについて両性間のコミュニケーションを可能にするためには、自らの性別に関する何かしらの操作が必要であるように思われる。そこではおそらく、多元的自己（浅野編 2006）を生きる現代の若者たちが自らの性別をどのように取り扱っているかに関する振る舞いの一端を見ることができるだろう。

## 調査・結果

オタク向け同人誌即売会での参与観察と聞き取り調査を行った。その結果、以下のような知見が得られた。①性別越境的消費の対象となりやすい作品は「萌え」と呼ばれる男女共通のコードを介して解読が可能であること。②「やおい」表現がその対象となることが比較的多いこと。③主として語られるのはキャラクター同士の関係性や物語であり、性行為描写に関する議論は比較的少ないこと。④そのようなコミュニケーションはイベント期間中に限定されがちであること。⑤当該コミュニケーションの場面では現実の恋愛を意識した振る舞いはなされず、そのような振る舞いは避けるべきだと考えられていること。⑥イベント期間中には他にも男性参加者が「やおい」的身振りをとる、異性装をするなどの性別越境的な振る舞いが随所に見られること。

## 考察・結論

現代の若者は様々な他者と複数のチャンネルにまたがる関係を持つようになり、そこではそれぞれの状況に適合的な、多元的な自己意識を持つことが要請されるようになってきている。そこでは「男／女らしさ」も柔軟に変化させることが求められるが、ポルノグラフィの性別越境的コミュニケーションの現場ではそれに留まらず、そういった「らしさ」の積極的な放棄こそが求められているようであった。

従属的男性性とされる「オタク」男性と、ジェンダーを攪乱する「やおい」を消費する女性が会する場では、男／女らしくふるまう者は「空気が読めない」として斥けられ、男／女らしくないふるまいこそが状況に適合的と判断されていた。彼らは必ずしも現実の異性愛を望まないわけではないが、この場において異性愛的ふるまいはコミュニケーションの阻害要因となるため、そこから一時的に離脱しているのである。

## 文献

浅野智彦編, 2006, 『検証・若者の変貌』, 勁草書房.